

石丸伸二市長に

聞きましました

芽生えた思い

記者：前職のお仕事について教えて下さい。

市長：三菱UFJ銀行で経済を分析・予測する専門家(アナリスト)をしていました。為替アナリストは世界全体で10人程度いて、その中の初代ニューヨーク駐在でした。強く望んで手にした仕事だったので、とてもやりがいがありましたね。

記者：そんな魅力的な仕事を捨ててまで市長選に挑んだお気持ちは？

市長：愛です、愛。ふるさとに対する愛情は、一度外に出たからこそ、強く芽生えたように思います。

記者：ふるさと愛だけで、そこまで！

市長：昔から、何かの役に立つ人間でなければならぬという思いがありました。そのためには力が必要なので、常にスキルを身につけ能力を高めるように行動してきました。市長選を前にして、「今までのすべては、このためだった」と思えたんです。

記者：突然の立候補にみなさん驚かされましたが、努力と信念に裏付けされたものだったんですね。

市民と一緒に

記者：演説はとも分かりますが、市民の方の質問にも誠実に応じられていましたね。

市長：前職の時に、講演会を年間50本ほどやっていました。「答えが聞ける」と期待している人に対して、「知らない」「分からない」と言いたくないという当時の姿勢が生きています。

記者：選挙活動中には、たくさん市民の声を聞かれたと思います。が、どう感じましたか？

市長：一番耳にしたのは、まちの衰退を悲しむ声です。なんとかしたいけれど、どうしたらいいのか…。悲痛な叫びを聞きました。ただ、それは「諦めたくない」という意思でもあります。光を見いだそうとする市民のみなさんと接し、「このまちならできる」という思いが強まりました。

記者：印象に残っている出来事はありますか？

市長：後援会の会長から聞いた話ですが、高齢の女性が、僕が市長



これまでとこれから

市民との触れ合いも大切にしていきます。



市長：僕が立候補したことで、市民の方も政治について熱くなってくれました。この熱がまちを盛り上げる力につながっていくと思います。

記者：市民の方の関心も高かったですね。

市長：私が立候補したことで、市民の方も政治について熱くなってくれました。この熱がまちを盛り上げる力につながっていくと思います。

安全が最優先

記者：改めて、市長になった今の感想を聞かせてください。

市長：正直、ワクワクしています。僕はトライアスロンをしているのですが、そのスタートラインに立った時と同じ感覚です。緊張感と高揚感が入り交じっています。あとは、ひたすら前に進むだけです。

記者：特に力を入れて取り組みたいと考えている施策は何ですか？

市長：今は自然災害と新型コロナウイルスへの対応です。避難所の安全確保を最優先とし、最新情報を的確に伝える取り組みなども進めます。例えば、高齢者が手に取りやすいようにハザードマップの冊子化を準備しています。

記者：新型コロナウイルス対策についてはいかがですか？

市長：まずは、予防策の徹底について、引き続き注意喚起を行っていきます。次に、市内で最初の感染者が出た場合の封じ込め策が重要です。感染の封じ込めには感染経路の把握が必要であり、関係者が進んで協力できる環境が求められます。ただ、そのときに問題となるのが関係者への誹謗中傷です。

市長：どういった誹謗中傷を抑えられるでしょうか？

市長：他者への攻撃は、自分を守りたいという防衛本能から生じます。適切な情報発信で不安を取り除くと同時に、誹謗中傷の抑制こそが封じ込め策を機能させる、自分たちを守る手段になるという認識を広める必要があります。

記者：怖いのはみんな一緒ですもんね。

市長：もう一つ！この暑さの中、マスクをして苦しそうに歩いている方を見かけるので、熱中症にならないかとても心配です。厚生労働省は、屋外で人と十分な距離(2m)が取れる場合、マスクを外すことを推奨しています。熱中症にはくれぐれも気を付けてください。